

大森山動物園「レッサーパンダ」の これまでとこれから

人気動物のレッサーパンダを大森山動物園で飼育するようになったのは、今から26年前の1997年で、ふれあいランドのオープンに合わせて新たに導入することになりました。今では順調に繁殖していますが、これまでの26年間は苦労もありました。この特集では、歴代担当飼育員がリレー形式で大森山動物園におけるレッサーパンダの歴史と未来について語ります。

レッサーパンダの飼育に初挑戦

1997年～2001年、2016年担当 飼育展示担当 藤原 直樹

1997年2月、大森山動物園で初めてレッサーパンダを飼育するにあたり、福井県の鯖江市西山動物園へ研修に行きました。西山動物園の皆様には、エサ作りや衛生面での注意点、夏の暑さ対策などを丁寧に指導してもらいました。

同年4月26日の「ふれあいランド」のオープンにさきがけ、4月7日に西山動物園からメスの「花」が、翌日に山口県の周南市徳山動物園からオスの「健健（ジェンジェン）」がやってきました。2頭の性格は正反対で、花はマイペースなおっとりやさん、健健はやや神経質な性格でした。獣舎内の環境に慣れさせ、2頭の相性を見極めるため、時間をかけて準備しました。繁殖シーズンを迎えると、健健は積極的に花にアピールするものの、花は素っ気ない態度を示し、残念ながら繁殖にはつながりませんでした。



健健(ジェンジェン)

初めての繁殖に成功

2003年～2006年担当 飼育展示担当 鈴木 昌典

2003年からレッサーパンダ担当になりました。前担当者が花と健健による繁殖の道筋を作ってくれましたが、多摩動物公園(東京都)からナナ(メス)が大森山に来てくれたので、高齢の花と健健とのペアリングをあきらめ、ナナとのペアリングに切り替えて繁殖に挑みました。当時は千葉市動物公園の「立つレッサーパンダ風太」が全国的にブレイクし、当園のレッサーパンダも「立つのですか?」との質問を何度も受けたことを思い出します。

そんなレッサーパンダブームの中、当園初の赤ちゃん(双子)が生まれました。ナナは初産でしたが一生懸命子育てをし、私も巣箱を増やし子どもを隠せる場所を作るなどのサポートを行いました。現在、ユキヒヨウの赤ちゃんが人気で、展示場にたくさんのお客様が見に来てくださるよう、当時のレッサーパンダ舎にもたくさんの方が来てくれました。子育てが落ち着いたナナに「ありがとう」と「お疲れ様」の感謝の気持ちを込め、自分では絶対には買わない高級なバナナをプレゼントしたことを思い出します。

翌年には三つ子も産んでくれ、レッサーパンダ舎は大いににぎわいましたが、同年に健健が亡くなり、大人のオスが不在の状態です。次の担当者にバトンを渡すことになったのが、唯一の心残りとなりました。数年しか担当していませんが、動物の生死を経験し、動物飼育を考えさせられた中身の濃い数年間でした。



当園では初めてのレッサーパンダの赤ちゃん

レッサーパンダ家系図



レッサーパンダ展示場

目に入れても痛くない!? くらい愛らしい動物

2007年～2015年担当 飼育展示担当 堀籠 麻子

前担当者が繁殖に成功し、とても賑やかな環境になった当園のレッサーパンダ。母1頭、仔4頭でバトンを受け取り、他の動物園との搬出搬入を経て、とても入れ替わりの激しい期間を担当しました。当時飼育していた「ナナ(メス)」と「陸(オス)」にそれぞれ繁殖相手をと、他園に掛け合っていた矢先、衝撃的な事実が判明しました。ふと、陸のお股にあるはずのものがないことに気づく飼育員。そうです、陸はオスではなくメスだったのです。そんな出来事もありましたが、ナナと陸の相手に名乗りを上げてくれたのが、立つレッサーパンダとして一世を風靡した千葉市動物公園の「風太(オス)」の長男、「ユウタ」です。「有名なレッサーパンダの子どもが秋田にやって来る！」と当時、期待と不安で胸がはちきれそうになったのを覚えています。ユウタは陸ととても相性がよく、2013年6月に「ゆり(メス)」が生まれました。



ゆりと陸(右)

ゆりがすくすく育ち一人前になった頃、ユウタは白内障、陸は歩行困難になり、約8か月間の介護を経て陸は永眠しました。2015年3月、長野市茶臼山動物園から「ケンシン(オス)」がゆりのパートナーとして来園し、2頭の交尾を確認してから後任へバトンを渡しました。出産には携われず少し残念でしたが、貴重な経験をさせてもらいました。(次ページへ続く)

ゆりは2組の双子を出産

2017年～2019年担当 飼育展示担当 関谷 藍子

ゆりが初産で、双子の「小百合(メス)」と「ケンタ(オス)」を産んだ翌年の春に、担当を引き継ぎました。双子の育児が落ち着くと、ゆりとケンシンの2度目のペアリングを開始しました。また、そのペアリング期間中に、高齢のナナ(16歳)が体調を崩し、介護生活も始まりました。介護に応じてくれるように、一時は回復の兆しが見られましたが、最後は静かに息を引き取りました。その直後、ゆりとケンシンの交尾を確認しました。そして2018年7月12日、「かんた(オス)」と「ひなた(オス)」が誕生しました。ナナから命のバトンを受け継いだようで、愛おしさもひとしおでした。2度目の子育てに挑むゆりは、神経質になることもなく、穏やかにたくましく、2頭のやんちゃな双子を育て上げました。一方、小百合は親離れし、兄弟のケンタが他園に移動したことで急に一頭になり、運動量が減ったせいか、ぽっちゃり問題が浮上しました。双子の弟たちとの関係も悪くなかったため、短期間でしたが、全国でも珍しい4頭の多頭展示を行ったこともありました。

3年という短い期間でしたが、飼育員冥利に尽きる濃厚で幸せな日々を送らせてくれたレッサーパンダたちに感謝しています。



全国でも珍しい多頭展示

快適な暮らしのために

2020年～2021年担当 飼育展示担当 阿比留 優一

大森山動物園で働き始めて、最初に担当したのがレッサーパンダでした。当時、6頭のレッサーパンダを飼育しており、その中で最年長がユウタ(当時14歳)でした。老化による健康問題が生じ、運動機能の低下や薄毛症状が見られました。白内障も患っていたため、外で活動する時は、飼育員が付き添う必要がありました。そこで、飼育員がいなくても運動できるように台を作成しました。初めは躊躇していましたが、しばらくすると台に登り、リラックスするようになりました。その他、飼育員と一緒に散歩する回数を増やし、定期的なブラッシングや皮膚の保湿にも注意したところ、1年後には毛並みにボリュームがでてきて、歩調も軽やかになりました。毛並みの改善により、数年前と比較しても若返ったように感じたものです。しかし、主食である笹を選び好みすぎるため、他の個体が食べている葉には見向きもしませんでした。ユウタが好みそうな葉を探すのが日課になりました。

動物を相手にする飼育員の仕事は毎日が勉強です。動物のために何ができるのかを学ばせてくれた2年間でした。



台の上でリラックスするユウタ

いのちのバトンをつなぐ

2022年～現在(2023年)担当 飼育展示担当 櫻庭 美千代

前担当者から6頭のバトンを受け取りました。必死に生きたユウタは2022年5月に永眠し、その後メンバーの大きな入れ替えがありました。かんたは福井県の鯖江市西山動物園に、小百合は札幌市円山動物園に移動しました。そして、小百合と入れ代わりで、円山動物園からメスの「円実(マルミ)」が来園しました。その最中に、肝っ玉母さんのゆりが亡くなり、当園のレッサーパンダは、ケンシン、ひなた、円実の3頭になりました。

臆病な性格のひなたは、いつも先陣を切るかんたが急にいなくなり、外に出る時は恐る恐る辺りを見渡してから、ゆっくり移動していました。そんなひなたも現在は落ち着き、徐々にオスらしさが増してきました。実は、円実もやや臆病なところがあります。ひなたは時々、網越しの円実を見つめに行きますが、円実は少し離れて見えています。しかし、ひなたがその場を後にすると、円実は追うように網に近づきます。今後は繁殖のため、ひなたと円実をペアリングすることになりますが、お互い嫌いではないようです。

臆病な2頭は、この先大丈夫かと不安を感じることがありますが、いのちのバトンを繋いでいくため、しっかりとサポートしていきたいと思います。これからの2頭の成長を温かく見守っていただけると幸いです。



2022年11月に来園した円実

大森山動物園ではこの先も他の動物園と協力しながら、レッサーパンダという種の保存に取り組み、来園者の皆さまが生息地のレッサーパンダに思いを馳せられるような展示や「まんまタイム」などのイベントを頑張っていきます。